

# 無量壽經鈔を通觀し望西樓持説の一斑を窺ふ

三 長 覺 靜

## 一 本書述作の由來

古來望西の鈔ミ略稱せらる、無量壽經鈔一部七卷製作の由來に就ては、作者了慧師自ら其卷末に附記せらる、所に依て明らかであり、それは以て作者の風格並に本書の特徵異彩を窺ひしのぶに足るが故に左に摘録する。

永仁三年乙未未四月二十五日黑谷上人始帥記之、明年正月十二日終於功一矣、同五年二月治定之一畢、其濫觴者先師和上

有嗣法上足講良、正應元年戊子春請曰先師鈔記皆以整足、但所闕者大經鈔耳、夫親稟承輩不闡披闕於末學者定迷文義、冀記先聞資未聞焉、予雖受斯請（中略）再三固辭而送七廻、永仁三年乙未春重示曰、須先帥記、於治

定者一門會合評義取捨云々、兩月之間此責四度、予不得罷而鈔記之、發起慶悅而披覽取捨、同法然空問答而再三

精論、然後治定已畢、斯年之秋兩聖同滅、嗟呼悲哉法燈忽消、慶哉記鈔早終、予若默止悲貽將來矣、此鈔一部七卷

雖記相傳義定有其誤歟、留贈後賢勿恐添削焉。

是に由て之を觀るに三祖記主上人一代の鈔記五十餘帖に及び宗義を闡明して殆んぎ餘蘊なし雖も、未だ大經に就ては直接鈔記する所なき故、末學未聞の徒を資けんが爲め、望西同門の切なる請求により、永仁三年四月廿五日起草翌年正月十三日脱稿し、同法ミ評議取捨し再三精論して終に同五年二月治定し畢つたもので、尙其各卷の奥書によれば正

安二年九月執筆し同年十月二十四日清書して後見に留贈せられたものである。

而して本書が上木せられ今日に傳はるもの五本、其第一は永仁三年板、第二は慶長二十年近江法橋良專開板の木活本、第三は寛永八年同上覆刻の中野氏伴の刊本、第四は延寶七年十月勘文校正の首書本、及び第五延享三年版行の會本まで、一淨土宗全書に收むる所は此會本である。

## 二 一 部 の 結 構

本鈔は大經を釋するに大に開て、大意を明すこゝ、題名を釋するこゝ、經文を解するこゝの三門を立て、此中第一の中に教起の所因こゝ、所說の大猷こゝ、宗體の定判こゝ、藏教の所攝の四段を開き、又第三に於て序正流通の三分を別ち、其正宗分の下淨影の所行こゝ所成こゝ所攝の三段科を用て大料とし、宗家の七段分別を細料として依用せられて居る。左に其大綱を圖示しやう。

大意

第一卷 盡徒衆中菩薩  
第八轉法輪相

教起所因、所說大猷、宗體定判、藏教所攝、

釋題名

釋經題、釋譯人

釋經文

序 文

證信序

我聞如是

發起序—說時、教主、說處、徒衆、

一時佛以下

正明發起 三雙  
六重

正宗分

明所行 苦蘊因  
位願行

明勝因 發願緣、發願相

明勝行 淨土行、法身行

明勝果 勝依果、勝正果

明所成 彌陀果  
位身土

明勝報 總明所成佛身別明所成徒衆

明極樂 依報土寶樹、伎樂、約土明人舊往報勝

明所攝

明悲化 凡夫往生、聖人往生、欣厭境界

明智慧 一舉得失顯智慧、一舉攝聖顯智慧

流通分 嘆經勸學、聞經得益、現實表實、大眾同喜

爾時世尊諸根悅豫以下

佛告阿難乃往過去以下

阿難時彼比丘於其佛處以下

隨其生處在意所欲以下

阿難白佛法藏比丘以下

又其國土七寶諸樹以下

佛告阿難其有衆生以下

佛告阿難汝起更整以下

佛告彌勒其有得聞以下

第二卷 靈正宗如來勸說

第三卷 自法藏說願盡第二十願

第四卷 願盡第四十八

第五卷 自立誓講證靈大經上卷

第六卷 自下卷初靈勸修行

第七卷 自勸捨疑惑至下卷末尾

### 三 本書の内容

本書は異譯の大經並に本末の往生論を對較引證し、二祖三代相傳の正義を經こし、博く諸經論の所説及び淨影、嘉祥、義寂、憬興、玄一等諸師の大經釋を緯こして、大に無量壽經の旨趣を發揮せるものであつて、其博引旁證にして然もよく整頓せられ、且つ隨所に卓見以て文義が闡明せられて居る。問師の之を重要視せられ、觀徹、義山師等の大經を講ず

るや自ら此書に準據する所甚だ多きも洵に所以ありといふべきである。

然し本書は既に相傳の正義を規矩準繩として纂述せられ、殊に本書脱稿の後同門の取捨問答を経て治定せられたものであり、且つ其説述も簡約なる故、此書に依て直ちに述者の自義持説を明確に辨知することは殆んど不可能といつてもよからう。そは尊問愚答記の説や糅鈔、頌義等に望西の自義として散見する所を以て、本書に對望し檢索するに、或は省略せられ或は極めて略述せらるゝを見るに由つても然か斷ぜられると共に、此が即ち宗徒の均しく本書を尊重し來つた所以であり、將來も亦永く愛翫せらる可き此書の特點でもある。こはいへ本より本書は唯だ相傳の義をのみ祖述せるものではなく、往々諸解を檢討批判して取捨立説するに獨自の識見に出づるものありて、其處に若干相傳に異見を持せし哉を推見せしめらる。仍て以下本書中に顯はるゝ作者の持説と見做さるゝものに就き其重要なる二三の問題を採つて概述することとする。

#### 四 一 重 發 心 説

大經上卷に法藏菩薩の發願相を明すに所謂地前發心と地上發心との二文あり。即ち二十行の偈頌の前に、

時有國王聞佛說法心懷悅豫。發無上正眞道意。

と説き、又四十八願文の前に

時彼比丘聞佛所說嚴淨國土皆悉親見。超無上殊勝之願。其心寂靜。志無所著。一切世間無能及者

といふ。

此二文所明の發心に就て古來諸師異解し地前、地上、阿羅漢果、破析性空、八地上或は一生補處の發心に當る等といひ、又經の文相發意と發願との二重になつて居るので、或は是れ二重の義なりといひ、或は一重なりと解す。此中特

に論點ニなれるは法藏の發心が地前十向滿なりや地上初地なりや、又其二重に亘るや地前地上の何れかの一重なりやといふにある。

而して本題に對し道光師は淨影二の重發心説に與し、二重發心は獨り淨影のみならず、又義寂、玄一同じく然か判ぜられて居る。然る所以は法藏比丘尋發心の後に、世饒王佛に對して斯義弘深非我境界ニて廣く諸佛如來の淨土の行を敷演し給はんニこを請願せられる、は、明に是れ法藏比丘が地前に在て地上の行を請するものでなければならぬからである。而して佛の答請を聞いて即ち超て發願して居られるのだから超發願は地上の發心である等ニ述成せられて居る。加之相傳に契ふ初地一重の義に就ては淨影等の師未だ此解を作らず、今異解を述す、恐慮甚だ多し學者思擇せよニまで言はれて居る。

此一段(淨全十四、五五)の說述頗る精緻にして然も相傳の義ニ暗に背馳す。大經問書一(續淨全十)に然道鈔以淨影義ニ存ニ本義ニ是尙相承之暗故歎の評言心得べきものか。

## 五 設我得佛の佛の自他受用説

願文一に設我得佛ニ前提せられるが、其佛ニは自受用身であるか將た他受用身であるかは、三祖門下の異論の一點ニなつた所である。今此に對する道光師の說を窺うに、本書第三(淨全十四、七二頁)には唯だ

佛他受用ハ 内證成道雖レ不ニ相離ス 發化他願ヲ時還指テ化他身ヲ 而云ニ得佛等ト令レ增ニ機化ニ故禮讚ニ云ニ彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛ハ已上又有ニ義云

このみ約説して其意を委悉されて居らない、然し此論に就ては述聞鈔、同口決下、十六疑問答、同見聞六等に可なり詳にされ、又糝鈔第二十四にも三祖同門の此れに就ての問答往復及び問師自らは二義を存する等のニこが傳へられてある

から、此等に依つて其内容を明かにすることが出来る。結局望西樓の義は名越及び藤田所立の義に共同し、白旗及び禮阿の説に相對向したものである。引文「又有一義云々」の一語は口決鈔下所傳の「昔法光明院禮阿與望西樓相論、院云々」云々、此書製作の由來を思ひ合され、其言約なりといはれへ意味深長なりと謂ふべきである。(大經聞書三續淨全十七、七七參照)

## 六 正念と來迎との前後

第十九來迎引接の願に就て、佛の來迎に由て衆生正念に住する哉、將た正念なるにより來迎に預る哉の疑は既に宗祖大師御在世當時に出たことは、和語燈錄第十四檀王版（一七〇頁）に

もこよりほこけの來迎は臨終正念のためにて候也。それを人のみな臨終正念にて念佛申たるに、佛はむかへ給ふこのみ心えて候は、佛の願を信ぜぬにて候也中たゞの時によく申をきたる念佛によりて、佛は來迎し給ふ時に正念には住す申べきにて候也々々

こあるによりて想見せらる。從て此れが三祖門下の間にあつても相當重大視されたものと見へ、淨土要略續淨全四（一二七以下）尊問愚答記同上（九七）に之を究明するに努られて居る。其後此問題につき合讚の如きは道公の意に従ひ正念後の來迎と見做せるも、多くは相傳へて鈔主を異議者とし、大經聞書二續淨全十（七、九五）には明に「當流學者中一兩存此義輩有之云々」即道公其隨一是亦相承不足故也」と評定して居る。而して之を本書に就て見るに淨全十四（九一）

問既以諸行爲佛迎因明知諸行生因本願何云攝機答委細料簡如宗要等云々舉要言之爲攝念佛及諸行機而臨終時令心不亂現其人前故云攝機中略既佛力加令機正念由正念故即得往生下略等

と言つて、直接正念と來迎との前後を問題として述べられては居らないけれども、決疑鈔三淨全七（二六三）の文に符同し、悲華經稱讚經等に依て正念の上の來迎説を採つて居り、それは元祖大師の指南に順するものである。仍て更に之を尊問

愚答記に就て見るに此れには左の如く委説されて居る。

約<sub>二</sub>平生廻心機<sub>一</sub>者前後難<sub>レ</sub>定感應道交不<sub>二</sub>一往<sub>レ</sub>故或有<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>彼平生善行<sub>一</sub>而得<sub>レ</sub>正念<sub>上</sub>或有<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>佛來迎<sub>一</sub>而得<sub>レ</sub>正念<sub>上</sub>矣若約<sub>二</sub>臨終廻心機<sub>一</sub>機依<sub>二</sub>正念<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>佛來迎<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>因不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>來迎<sub>一</sub>故也和尙釋<sub>二</sub>下々品來迎<sub>一</sub>云<sub>二</sub>臨終正念<sub>一</sub>即有<sub>二</sub>金華來應<sub>一</sub>依<sub>二</sub>機正念<sub>一</sub>見<sub>二</sub>佛來<sub>一</sub>由<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>佛光<sub>一</sub>正念増上餘障悉除臨終無<sub>レ</sub>障豈限<sub>二</sub>心亂<sub>一</sub>

此文言によれば道公は平生廻心機に就けば、正念ミ來迎ミは前後不定であるが、臨終廻心の機は正念に住するに依て佛迎に預り、然も佛迎に依て正念増上すといふのであり、此れが所由を散善義の下々品釋に得て居るのである。即ち佛迎は所被の機根の不同に由つて正念ミ相前後すミするもので、正念決定には必ずしも佛迎を要ミしないものである。從て來迎の願に基づき正念の爲めに攝取の來迎を仰で受けるミするも、平生善行の一機にあつては自ら正念決定し、佛迎を待て後然るに非ず、又來迎は機の正念を要ミするもので、畢竟佛迎は大慈悲の流現ではあるが、所被の機にミつては必須のものでなく、佛邊に於ても亦機功を待つものといふことになる。此に於て佛迎を確認しながらも自ら機功爲本ミなり、導師の經文亦文字通りに正念の上の來迎ミ局り見るに至り、當代並に後代批議の的もなつたものであらう。

案ずるに宗祖が來迎の上の正念の義を取り給ふは、凡夫の地體ミして其正念決定は佛迎に預らずして本より能はざる所なりこの御意に出づるものなるこは前掲の文に徴して推斷し得られ、若し更に此意を以て散善義の文を望むミ、そは顯益現事に就き、又以て佛の加祐尊嚴なる來迎に預らんミせば須く平生に於て廻心修行すべきを教へんこの意に出で、實は下々品のもの、正念發動そのものこそ既に佛迎の冥益にして唯だ當人が佛迎を確認せざるが故、正念以後ミ思ひなすに過ぎざるを標示されたものミ窺はれる。

要するに正念ミ來迎ミの前後に就ては、相傳の義は來迎の上の正念にあり、道公亦大途此に従ふも、生佛の感應は相對的なるものミせらる、意向存せしもの、如く、而してそは一般論ミしては機根萬差なるを以て當然たるべきも、末世

鈍根を正機として、の正流の義は若干相去る所があつたやうである。然も此は前述の二重發心説を解する所、其軌を一にし、師の風格を偲ばさしむる所であり、又此れが本書述作の根源由來もなつたものと思はれる。

言ふ迄もなく以上別述した以外にも、大經鈔一部中には、或は四十八願の生起は必ずしも次第なしとし、或は第十八願の體に就いて三心は要なりと雖も別して本願にあらず、今生因の行を取て願體を爲る時、不具三心の唯行を簡ばんが爲めに此三心を擧ぐ、若し行に従て論ずれば本願に屬す可く、之を離れては更に本願に非すとせるが如き、正流の義と合致しないものもある。然し此の如き大同少異のものまで一々擧げることには餘り煩はしき故、今は唯だ本書中特に道光師の異見として目立つたもの、みの記述に止めて置く。